

放流技術開発事業（抄録）

（ ヒ ラ メ ）

吉尾二郎・梶 明広

本調査は栽培漁業技術開発事業の一環として、人工放流ヒラメの放流効果を究明しようとするものである。詳細については、昭和60年度放流技術開発事業報告書（日本海ブロック・ヒラメ班）を参照されたい。

要 約

天然稚魚分布生態調査

ヒラメ稚魚の分布は流入河川を中心に高密度であり、調査域の平均分布密度は0.11尾/1m²と試算された。全採集生物（魚類）に占めるヒラメの割合は約50%であった。

放流追跡調査

昭和60年の人工魚放流尾数は8万尾（ヒレカット2万尾含む）であるが、放流時期が遅く、現在までの再捕は無い。昭和60年放流の天然未成魚の再捕は、現在まで8尾（1.9%）である。

昭和59年の人工放流魚の再捕報告は無く、市場で無眼側色素異常魚が数尾確認されたのみである。

昭和59年放流の天然未成魚の通算再捕率は7.8%であり、再捕は放流から400日以上に及び、最大移動距離は150 kmにも達した。

昭和58年の人工放流魚の再捕報告は、今年度には無く、市場での色素異常魚混獲率は0～1.1%であった。

漁業実態

4・5月は2才魚を主体に漁獲されるが、高令魚も混獲される。9月には1・2才魚で漁獲物組成が構成されるが、1才魚が大半を占める。

ヒラメの成長式は2～5才の間で、 $\ell_t = 292.4 (1 - e^{-0.0329(t+2.003)})$ が求められ、全長と体重の関係式は、 $W = 5.884 \times 10^{-3} L^{3.1497}$ が得られた（適応範囲10～67 cm）。